

区分

庶民の生活は今日も流れていた
垢で黒光りした浮浪者と共に・・・

勿論、天気予報は彼らのためにこそあるのだ
つまり、現在という時のためにだ

そうした流れは、いずれも清らかなものだった
そして　それだけだった

何故そんなにも清らかなのかを僕は知っている
ゴミの山を大事そうに抱えていた浮浪者も・・・

彼らに必要なのは生のざわめきなのだ
ところが僕に必要なものは死の余韻なのだ

こうした区分が無意味であることは確かだ
ただ、僕は天気予報などに煩わされたくないだけのことだ

(1991.6.20)